

第8回生物多様性部会専門部会における追加意見

1 資料2に対する追加意見

<板井委員>

別紙のとおり

2 資料3に対する追加意見

<板井委員>

- ・いつ時点かの対話時に話した事柄ですが、大きなイワナが淵にいる虫をつついて食べるというのはまったくの聞き違いです。淵にいる虫が羽化するとき川底から浮上し、その途中であるいは羽化後に落下流下しイワナに食べられるので、淵の落枝落葉中の底生動物がきわめて重要なので、調べ忘れてはいけなと申したのです。上記のことは、日本陸水学会のメンバーにより一般への普及本として著された「川と湖を見る知る探る」（地人書館、2011）にも、溪流にとって落葉が非常に重要な栄養源になっていることが解説されています。ただしこの書には引用文献はついていないので、質問があれば日本陸水学会か、著者（この章は村上哲生氏＝名古屋女子大学）に問い合わせてください。川虫を巡る食物連鎖の重要性は、村上（2004）の「森の中のサケ科魚類（前川光司編「サケ・マスの生態と進化」第5章、文一総合出版）でも詳しく説明されています。上の村上の例は陸から川への流れですが、ここでは川から陸へ運ぶ動物、陸へ上がったその動物を捕食する動物が存在することの意味を改めて強調しています。前者の例は水生昆虫、サンショウウオ、カワガラス、後者の例としてはコウモリ類、河畔の鳥類などをあげています。要は、彼は川と河畔林のつながりの重要性を強調しているのです。JR 東海はかつて食物連鎖図として川の生物と陸の動物との関係を示した図を提示したことがあります。このあたりの調査をまったく欠いていたために、きわめて抽象的なものに留まってしまいました。最近イワナの食物分析を始めて、これらのつながりの分析の足がかりとしています。惜しむらくは調査個体数が少なすぎます。また季節による変化は劇的ですが、これもまだ追えていません。（p. 4-63）

<岸本委員>

- ・「学術的研究支援」について、当日増澤委員からも意見がありましたが、ここには学術的研究支援だけでなく、「自然体験・教育の場の創出」のような意味合いが深い内容がふくまれているので、そうした項目を別途立てるか、併記したほうが良いと考えます。この関連については同ページの最下部2行にも「自然体験、教育」が「学術的研究支援」に含まれている文言がありますが、同様に見直すべきでしょう。（p. 1-13）
- ・「経済と社会の発展」は”地域の”という言葉が必要かと考えます。「地域の社会・経済の発展」のような文言が相応しいかと考えます。（p. 1-13）